

『凶書寮本類聚名義抄』所引『遊仙窟』のテキストと和訓について

On *You-xian-ku's* Text and its Native Japanese Words in *Ruijumyogisho*

高橋 宏 幸
Hiroyuki TAKAHASHI

はじめに

『遊仙窟』の訓読語が「類聚名義抄」に引用されていることについては、早く築島裕博士の御論^{注1)}があり、その後の『凶書寮本類聚名義抄』の出現により証明されたところである。

『遊仙窟』が何時、日本に伝来されたのか不明だが、上代から日本文学に影響を与え、その訓読の歴史の古いことが察せられる。本邦の辞書においても、『新撰字鏡』や『倭名類聚抄』^{注2)}を始めとして、中・近世の辞書にまでその倭訓は引用され、また、『源氏物語』の注釈書など古典の注釈にも、その漢字と訓の関係が利用されたことについては平井秀文氏^{注3)}が調査・研究なさったところである。

『凶書寮本類聚名義抄』所引の『遊仙窟』の倭訓については、既に吉田金彦氏を始めとして諸氏の御研究^{注4)}があるが、中でも白藤

氏・内田氏は逐一対照して訓の位置づけをなさった。その驥尾に付して、『凶書寮本類聚名義抄和訓考證』の一環として、出現順に挙げて漢字・文脈との関係を考察することとした。

ところで、引用和訓の認定であるが、和訓の下に出典が記されていないが、その和訓がその文献からの引用であることは言うまでもないが、実は出典注記の次の出典無記入和訓も同じ文献から引用された和訓であるのである。この事実については、築島裕博士、山本秀人氏の明らかにされたことで、私も今まで扱った文献で同様な結果であったことについてはそれぞれ記述してきたところである。^{注5)}すなわち、和訓の下に「遊」と記されているものは「遊仙窟」からの引用として問題なく、今までもそれを対象に調査研究がなされてきたが、実は「遊」の下の出典が記入されていない和訓も「遊仙窟」からの引用であることである。本論においてはその視点から「遊仙

窟和訓」を取り上げて調査考察する。

(注)

- 1 築島裕「類聚名義抄の倭訓の源流について」(『国語と国文学』27巻7号・昭和25年)
- 2 蔵中進「新撰字鏡と遊仙窟」(『万葉』第29号・昭和30年)
「和名類聚抄と遊仙窟」
(『神戸外大論叢』第18巻第4号・昭和42年)
- 3 平井秀文「日本文学研究」第10号〜第18号所載の論文。
(梅光女学院大学)
- 4 吉田金彦「和訓からみた遊仙窟の諸本」
(『国語国文』第二五巻第七号・昭和31年)
白藤礼幸「『遊仙窟』古点本の訓の系統について―左右訓を手掛かりに―」
『松村明教授古稀記念国語研究論集』(明治書院・昭和61年)
内田賢徳「『遊仙窟』という条件」
(『説話論集』第十四集・清文堂出版・平成16年)
- 5 山口祐佳「図書寮本類聚名義抄を通して見た遊仙窟について(要旨)」
(『古辞書とJIS漢字』1号(平成11年))
中村拓也「図書寮本『類聚名義抄』と『遊仙窟』の語の研究」
(『古辞書とJIS漢字』1号(平成11年))
築島裕「平安時代の漢文訓読語に就きての研究」九六七頁

(東大出版会・昭和38年)

「静嘉堂文庫蔵毛詩鄭箋古点解説」(古典研究会叢書漢籍之部3『毛詩鄭箋(三)』汲古書院・平成8年)

山本秀人「図書寮本類聚名義抄における出典無表示の和訓について」(『高知大國文』第三二号・平成13年)

「図書寮本類聚名義抄における毛詩の和訓の引用について」(『小林芳規博士喜寿記念国語論集』汲古書院・平成18年)

高橋宏幸「図書寮本類聚名義抄所引『月令・月』の和訓について」(『国文学論考』第四〇号・平成16年)

「図書寮本類聚名義抄所引『律』をめぐって」(『国文学論考』第四一号・平成17年)

【凡例】

○『図書寮本類聚名義抄』は、勉強社コロタイプ複製本(昭和四十四年十二月)による。

○『遊仙窟』のテキストは次の古写本五本の複製を基とし、他の諸本についても平井秀文氏の訓読文(『福岡学芸大学紀要』第2号〜第19号所載)を参照する。

・陽明文庫本Ⅱ貞和5年(一三四九)写を嘉慶3年(一三八九)に転写

陽明叢書14『中世国語資料』(思文閣・昭和51年刊) 池上禎造解説

※右複製本の丁数(表・裏)、行数を記す。略称は「陽」

『陽』。

・真福寺本Ⅱ文和2年(一三五三)写

・貴重古典籍刊行会叢書(昭和29年刊) 神田喜一郎解説

※右複製本の頁、左右(原装は冊子本なので裏と表に当たる)、

行数を記す。略称は「真」・「真」。

・醍醐寺本Ⅱ正安2年(一三〇〇)写を康永3年(一三四四)に

転写

・古典籍索引叢書13『醍醐寺蔵本遊仙窟総索引』(汲古書院・

平成7年刊) 築島裕編 略称は「醍」・「醍」。

・金剛寺本Ⅱ元亨元年(一一三二)点

・山崎誠「鎌倉時代末期写遊仙窟有注本残巻影印・翻刻並に解

説」(『鎌倉時代語研究』第8輯・武蔵野書院・昭和60年。

『中世学問史の基底と展開』所収)

『金剛寺本遊仙窟』東野治之編(塙書房・平成12年刊)略称

は「金」。

・山岸文庫本Ⅱ南北朝〜室町初写

『別冊年報』Ⅲ(実践女子大学文学芸資料研究所・一九九四)

上野英子解題。略称は「山」。

○索引は次の労作を利用した。

・三ヶ尻浩『遊仙窟国語索引』自筆稿本(都留文科大蔵)

・三ヶ尻浩『校訂遊仙窟並ニ索引』昭和11年 自家出版

・西岡弘『遊仙窟索引(漢字並古訓)』昭和53年11月 國學院大

学漢文学研究室

・蔵中進『江戸初期無刊記本 遊仙窟 本文と索引』昭和54年

和泉書院

・築島裕『古典籍索引叢書13醍醐寺蔵本遊仙窟総索引』平成7

年 汲古書院

○注釈・口語訳は次の著書を参考にした。

・漆山又四郎『岩波文庫』(三九二五―三九二六) 岩波書店・昭

和24年。第2刷昭和61年

・魚返善雄『創元文庫』(B-71) 創元社・昭和28年

・八木沢元『遊仙窟全講 増訂版』明治書店・昭和50年

・今村与志雄『岩波文庫』(赤35-1) 岩波書店・平成2年

※テキストからの引用は、文脈のとれる範囲にしたが、その訓読文は『陽明文庫本』に代表させ、その他の諸本については、近似的の訓読ならば該当語句の部分に限った。

※テキスト表記の、片仮名はカタカナで、ヲコト点はひらかなで、私に補ったものは()で、再読文字は「」で、不読字はへで、別訓は「」で括った。声点は省略した。

二 和訓考証

(1) 法……(法)用 ミツクロヒス(上上濁上平平平軽)遊

(五頁2行目)

【本文】五嫂詠曰、自隠風流到人前法用多

〔陽〕五嫂、詠て曰、自「オノレ」、風流トミヤヒカなるを隠カク

(テ) 到ル人の前に、法ミツク用すること多シ。(四二ウ6)

〔真〕五嫂、詠て曰、自風流トミヤヒカナルコトヲ隠カクンテ到ル、人の前に法ハツ用トミツククロヒスルコト多シ。(四四右5)

〔醜〕五嫂・詠(シ)て曰(ク)、自ハ風流ワレのミヤヒカナルヲ「ミサヲナルヲ」隠カクムテ人ノ前に到レルことを法ハツ用トミツククロヒスルコト多シ。(三一オ5)

※『大漢和辞典』に「法用」の項目はない(六・一〇四三頁)。

魚返は「色香におごるひと、手だての多いこと」(五四頁)、八木沢は「礼法をふりかざすこと」(二六九頁)と語釈し、「人の前にて つくろひ飾る」(二七〇頁)と訳する。今村は「人の前では勿体をつけましたね」(八七頁)と訳し、「法用」は、「規矩」、「法度」という意味。また、「儀範」の意味に近い」と、項楚『敦煌変文字義統拾』により記す(一八四頁)。

※「みづくろひす」は『身繕ひす』の意で、和文でも用いられている語。身だしなみをきちんとする、整えること。「法用」との関係でいえば『型にはまった身だしなみに整える』という解釈になるうか。

(2) 酒サケ一(池)サケノウツハモノへ上上上上上上上上モタキ

〔平平平〕遊 (七頁4行目)

〔本文〕九曲酒池、十盛飲器

〔陽〕九曲の酒池ノウツハモノ、十盛の飲器ノウツハモノ (二七ウ1)

〔真〕九コノマカリ曲ノ酒池ノモタヒ、十トモリ盛ノ飲器ノサカツキ (一九右1)

〔醜〕九曲のウツハモノアリ、酒池のイツミ、十盛の飲器アリ。(二三オ3)

※「モタキ」の出典注記『遊仙窟』は「サケノウツハモノ」にも係ると判断される。図書寮本では「酒池」を「サケノウツハモノ」と訓読しているが、『陽』も『真』も文選読みで「シユチノウツハモノ」あるいは「シユチノモタヒ」である。訓としては「ウツハモノ」或いは「モタヒ」である。なお、二本とも異なる訓読の仕方をしているが、図書寮本の使用したテキストは左右訓だったのであろう。

(3) 潭水 季云音草：碧潭 アヲフチへ上上平濁平遊 (二七頁3行目)

〔本文〕直下則有碧潭千仞

〔陽〕直下トミオロセハ(則)碧潭ノフチなる千仞有(リ) (二ウ6)

〔真〕直下トミタセハ(ミヲロセハ)(則)碧潭千仞ナル(チヒロハカリナル)有(リ) (三左1)

〔醜〕直下トミヲロセハ(クタレハ)(則)碧潭のアヲフチ千仞ナル有(リ) (二ウ5)

※⑧と重複掲載。水部の熟語として『一切経音義』からの標出語「潭水」を配置し、その「潭」字の熟語として「碧潭 アヲフ

「手遊」を書き入れたものだが、別筆のようにも見える。(8)で詳述する。

(4) 風一(流) オモシロシ 平平平平平軽遊 (二七頁7行目)

【本文】歴訪風流 遍遊天下

〔陽〕歴ク、風流トヲモシロキことを訪ヒ、遍ク天下に遊ヒキ。

(五オ2)

〔真〕歴ク風流(ト) オモシロキコトを訪ラフ

(六左3)

〔醒〕歴ク風流のヲモシロキを訪ヒテ

(四オ3)

※テキストに「風流」は五例、三本とも「オモシロシ」と訓むのはここだけ。他は「ミヤビカナリ」〔醒〕は「ミヤビヤカナリ」とも」と訓む。(1)、(4)参照。

(5) 人一(流) ヒトカス へ上上上濁遊 (二七頁7行目)

【本文】忝預人流 寧容如此

〔陽〕忝ク、人流に預(ル)。寧(ロ)、此の如(ク)なる容ケン

ヤ。(二六オ4)

〔真〕忝ナク人流に預(ル)。寧(ロ)此(ノ)如(ク)ナル可ケ

ンヤ。(二七左5)

〔醒〕忝(ク)・人流に預(ケ)、寧(ロ)・此の如(ク)に容ルヘ

ケンヤ。(二九オ7)

※「ひとかず」は、「一人の人間として数えられるということ」の意で、この「如此」は前文の「事加諸(〓あれこれ口から

出任せを言う)を指し、「一人前の人物と扱われたのだから、そのようなでまかせを言うはずがない」と言っている文脈である。

(6) 波浪 上音幡 … 下中云廬右反 … 蓋一猶謾調 ウコカス

〔平平濁上平〕集 オモハズニ 〔平平平上濁〕遊

(二八頁5行目)

※「浪」の用例は校異を含めると四例あるが、そのうち刊本を含め諸本すべて「浪」字は一例だけで、付訓はないが「波」の意。その他三例は「ミダリニ」または「ミダリカハシク」と訓む。そのため三本間で「漫」と校異のある箇所が二例存する。ただし、「オモハズニ」と形容動詞に訓ずる点本はない。

(7) 漫々 音慢 … マスく へ上上〇〇易 ハヒコル 〔平平濁上

平〕ス、ロ 〔平上濁上〕遊 (二四頁4行目)

【本文】十娘何處漫行來

〔陽〕十娘、何の處にか漫に行キ去來シツル。(四一オ4)

〔真〕十娘、何の處にか漫シク行來シツル。(四二左3)

〔醒〕十娘・何れの處にか漫行キシテ來シツル。(三〇オ2)

*標出語は「漫々」とあるが、何を「本文」とする標出なのか未詳。「遊仙窟」に疊語の例はない。和訓に合う文例は右記のもので、醍醐寺本だけが一致する。

(8) 潭水 季云音覃：碧一(潭) アヲフチ(上上平濁平)遊

(二八頁3行目)

※(3)と重複項目。この「潭水」だけでなく、次順の「一然」「測」の三項目が一七頁と重複している。対照してみると、「潭水」において、一七頁の方は引用順が《季云：應云：玉云：順云：東云：碧一遊》と『東宮切韻』と『和名抄』とが前後し、また、『和名抄』からの和名にも声点がある。「一然」は同じだが、「測」においては「玉篇」からの引用の「案一中也」がない。この「測」字が『篆隸万象名義』第五帖(九〇オ3)所載ということから、「玉云」が『篆隸万象名義』からの引用と見なせば一七頁の方が一致する。二八頁は「案」すなわち「顧野王案」が記載されていることから「原本玉篇」からの引用とも考えられる。比べる佚文が他に存しないのでこれ以上何とも言い難いが、『図書寮本類聚名義抄』編纂に当たり、どこに配列すればより検索しやすいかということ「カード」を「句潭」(補入にはなっているが)の次に移動させたと考えられる。

※『万葉集』巻第一六・三八三三に「青測尔鮫龍取將來」とあり、アヲフチと訓む。

(9) 浅深 上中云七演反：下真云式針反：ムツマシ(虫損)遊 (三四頁7行目)

【本文①】五嫂曰向來漸々入深也

【陽】五嫂か曰、向來漸々に入深シキに入ル(也) (二九オ5)

【真】五嫂か曰、向來漸々に入深(也)。 (三〇左6)

【醒】五嫂か曰(ク)、向來漸々に入深とムツマシ(也) (二二ウ3)

【山】五嫂か曰(ク)、向來、漸々に深シキに入(ル)(也)。(14) 1

【本文②】五嫂曰向來太々不孫漸々入深也

【陽】五嫂か曰、向來太々孫ハ不とも漸々に入ルこと深クナリ

(三四ウ5)

【真】五嫂か曰向來太々孫ハ不 漸々に入深ムツマシキニ入(リ)シヨ(也)。(二六右4)

【醒】五娘曰、向來、太々孫ハ不。漸々に深入ケヌレ(也)。(二五ウ1)

※両本文同じような文脈だが、本文①は、「先ほどから、次第次第に情が深くなってきましたね」(八木沢・一二〇頁)、「いまのは、段々、おやすくなってきたわね」(今村・56p)という文脈で、「真」「醒」のように「入深」という熟語として、二人の情が深まる、すなわち「ムツマシ(クナル)」という解釈。しかし、『山岸文庫本』や『陽』のように逐字的に訓めば、「深」一字で「ムツマシ」ということになる。なお、声点は虫損のため不明。本文②は、「真」「醒」は「だんだん夜が更けた」とあるが、『陽』『真』(左訓、合点あり)は「段々と深みにはまるわ」(今村・69p)、「次第に親密の度が深くなってきました」(八木沢・一三八頁)の意で訓読したものである。

⑩ 涕涙：一泣：一々シホタル（平平上〇）遊 哭一ナキイ

サツル（〇〇平平上濁平）古語（三七頁7行目）

【本文】遂則被衣對坐、泣涙相看 下官拭淚而言曰

「一」等による標出文字の代替が必ずしも適切な文字を喚起しないことがある。この標出語順は「涙唾・涕唾・涕泗・涕淚・一泣」とあり、「一泣」の傍線部に充たる漢字は、引用文の「慈云目出涙曰涕、無声出涙曰一」を慈恩『法華經玄贊』卷第七末「目出涙曰涕。無声出涙曰泣」（大正藏七九二頁中段）と対照すれば標出語は「涕」であり、引用文中の「一」は「泣」であることが分かる。遊仙窟からの引用はその項目中なので「一々」は「泣泣」ということになり、觀智院本名義抄も「泣々」（法上八ウ8）であるが、遊仙窟の本文は「泣涙」である。古語拾遺の本文は「哭泣」である。

〔陽〕遂に（則）衣を被ヌイ・カウフて對坐、泣涙レテ相看

（ル）（四五オ4）

〔真〕遂に（則）衣を被（リ）對坐、泣涙とシホタレテ相看ル

（四六左3）

〔醒〕遂に（則）衣を披キ對ヒ坐テ、泣涙とシホタレテ相看ル

（三二ウ8）

※「シホタル」は、「泣く」意の齋宮忌詞（皇太神宮儀式帳）であるとともに平安時代以後の和文・和歌文学用語と思われるが、平安時代初期には四段活用で訓読にも用いられていた（大坪併治『平安時代における訓点語の文法』一一九―一二〇頁）とされる。全訓付訓の例はないが、次の「泣リ」はその送り仮

名から「シホタリ」と訓まれている。

〔啼キ泣リ悲ビ嘆キテ〕

（西大寺本金光明最勝王經平安初期点・一九二頁15行目）

〔悲ビ泣リ懊ビ悩ミテ〕

（同・一九三頁1行目。以上、春日政治博士御著による）

〔悲（しひ）泣リテ〕

（石山寺本四分律平安初期点・卷第三四）

〔其父母啼（き）泣リテ〕

（同・以上、大坪併治博士『石山寺本四分律古點の國語

學的研究』三二六頁による）

しかし、春日博士も「この語は奈良朝の文献にちよつと見出しにくい、平安中期には盛に用ゐられた。只下二段に活用させてゐるが、この四段は垂ルの古形と共にまだ古い活用を保つてゐる」と説明され、また、大坪併治博士も「和文のシホタルが下二段であるのと相違する。『万葉集』にナミダタリ（四四〇八）が、三卷本『枕の草子』にハナタリがあるのを見ると、シホタルも、本来「塩が垂れる」意味で、タルは自動詞四段であつたのを、和文では、「塩を垂らす」意味にとつて、他動詞下二段活用としたのであらうか。訓点語も、後になると、和文の影響を受けたらしく、下二段の例が現はれる」とされたように、古く四段活用だった可能性はあるが、平安初期点の訓読に平安中期以降の和文語を持つてくるのは少々無理があるのではなからうか。次の例から、

○…白髭の上ゆ 奈美太多利 嘆きのたばく…（『万葉集』卷第

二〇・四四〇八）

○不覚に 涕垂りて 哀泣チラル〔矣〕。（書陵部本雄略紀十

四年四月・卷第十四・石塚晴通氏御著428行
「ナミダタリ」と訓む方が自然のように思う。

(11) 澆瀆 宋云音鼻：ソ、ク へ上上〇集 ウスラク へ上上〇
〇〇遊 時一 アハテ へ上上平 政劇 イソカシ へ平平
〇〇〇 (五三頁7行目)

※テキスト本文及び註文に「澆」字は用いられていない。次の
「時一 アハテ」「政劇 イソカシ」に出典注記がないことから
何らかの混乱があるのではなからうか。

(12) 清一(冷) トス、シク へ〇平平濁上平 トイサキヨク へ〇上
上上濁上平 遊 水歟 (六七頁4行目)

【本文】 婀娜蒼茸 清冷颯颯

【陽】 婀娜トタヲヤカ蒼茸トモクサカリ 清冷トス、シク、颯

颯トフキサハク(カスカ)

【真】 婀娜とタヲヤカニ、蒼茸トサカリニ 清冷トス、シク 颯

颯トフキサハク (三七左1)

【醒】 婀娜とタヲヤカニ(ナマメキ)蒼茸とサカリニシテ、清冷

トス、シク、颯颯とフキサハク(カセフク) (二六オ8)

※「清冷」という熟語はこの一例だけ。図書寮本名義抄は、文選
読みの形式で二訓記してあるが、左右訓か。ここは花園の景色
の描写で、「あでやかに花木がおい茂り、ひやりとした風が吹

きそよぐ中」(今村・72p)と風の形容だから「涼し」の訓が
適当と思う。「潔し」は「水歟」と註記があるように水の形容
語。「清冷」の部分の水の描写と解した訓読があったものか。
八木沢(二四三頁)は、「風は清く涼しく、さわやかに吹きわ
たる」と両訓を生かした解釈をしている。「イサギヨク」と訓
む点本はない。

(13) 論議 オモフ へ平平上 遊 アケツラフ へ上上濁上〇〇〇遊
(七一頁上段)

【本文】 心中悵悵 復何可論

【陽】 心中、悵悌トイタム。復、何、論フ可ケむ。 (八オ5)

【真】 心の中悵悌トイタム。復何ソ論フ可キ。 (九左5)

【醒】 心の中悵悌トイタムテ復、何ソ論スアケツラフ可キ。 (六ウ1)

※欄外上段に書き入れたものだが、項目内容に乱れがあるよう
だ。「オモフ」の出典は不明。

※テキストに六例「論」字は用いられている。「醒」「真」はその
内の四例を「アゲツラフ」と訓むが、「陽」では全例(七オ1、
八オ5、一九ウ3、二七オ6、三九ウ4、四三オ3)を「アゲ
ツラフ」と訓む。ここにはその一例を掲げた。

(14) 信受 音迅：マコト へ上上上 易 ノフ へ平上濁 後 申也
オモヒテ へ平平上濁 遊 カタミ へ上上上 勝曼云一ツ
カヒ へ上上上 (七三頁4行目)

【本文】贈詩曰 今留片子信 可以贈佳期

【陽】詩を贈(リテ)曰、今、片子なる信を留(メ)たり。以て

佳期を贈ル可。

(四八ウ4)

【真】今片子ノイサ、カナル信を留メリ 以て佳期ニ贈ル可シ

(五〇右3)

【醒】今、片子ナル信を留メシム(メタリ)、以て佳期に贈(リ)

テ：可シ

(三五オ8)

※「カタミ」は、十娘と別れここを立ち去るにあつての「形見」の意であるから、「オモヒデ」も「思い出」で類義である。左右訓だったのでないかと考えられるが、この訓を記す点本はない。

(5) 作一(許) ソコハク 傘上上濁平遊 (七五頁3行目)

【本文】令人類作許叮嚀

【陽】人を(シテ)類に作許、叮嚀トネンコロナラ令む。

(七オ5)

【真】人を令(テ)類に作ス ソコハク 許ノ叮嚀トネンコロナ

ルコトヲ 下ネンコロナラシム。

【醒】人を令テ類に作許の叮嚀なりとネムコロナラ令シム

(五ウ6)

【金】人を令類に作許叮嚀とネムコロナラム

(四22・3)

※八木沢(五一頁)は、『如此』と同じ。俗語である。『許』は

語助の辞。」とする。

(6) 那一(許) 同

(七五頁3行目)

【本文】難時那許太難生

【陽】難シキ時に那許一ソ、太、生キルコト難(シ)。

【真】難シキ時に如許太タ生キ難シ。

【醒】難シキ時には那許とナヤマシウシテ、太タ、生キ難シ。

(五ウ8)

【金】難シ(キ) 時ニハ那許太生キこと・イケラムト・イケリ 難キウチハヤク。

(四22・6)

※この熟語も、八木沢(五一頁)は『如此』と同じ、俗語である。とする。諸本では、『陽』だけが図書寮本の標出語・和訓と一致する。

(7) 如一(許) 同

(七五頁4行目)

【本文】十娘曰五嫂如許大人專擬調合此事

【陽】十娘曰、五嫂、如許一イカナル、大人にシテ一チレハカ一專一に 此の事を調へ合セむと擬。

【真】十娘か曰、五嫂、如許・太ナル人ナレハカ專に調へテ和ケ

合セント擬。

【醒】十娘曰、五嫂、如許大人レハカ一ヲホキナルヒトニシ

テ、專、此の事を調へ合セムト擬ル。

(二九オ3)

⑱ 調一(諛) タハフレ へ上上上濁上 遊 (八三頁2行目)

※⑳と重複掲出。声点まで施した後に項目全てをミセケチにしている。前行の和訓「談諛」：タハフレ後」に惹かれてここに配列したものの、標出語「談諛」の続きでは、熟語の標出語「調諛」としては二字目にあたるので、熟語の一字目に当たる「調」字の次に配列した方が検字に適當と考えミセケチにしたものか。しかし、熟語の場合必ずしも第一字目を標出の基準として優先している訳ではないことは、「常」「布」などを見れば明らかである。ただ、筆頭標出語が単字の場合と熟語の場合とでは異なるようだ。

⑲ 調 音條：ト、ノフ へ平平上平 月 又音誅 アシタ へ平平平 詩 シラへ白：ナヤマス へ平平上平 遊 クヒル へ上上濁平 (八三頁6行目)

【本文】窮鬼故調人

【陽】窮鬼故「コト(サラ)」に人を調すなりけり。(八オ6)

【真】窮鬼ノイキスタマカ故に人を調ス。(二〇右1)

【醒】窮鬼のイキスカタ故に人を調スナリ「セルカ」。(六ウ3)

【金】窮鬼「イキスタマ」故人調ス (図25・5)

※出典注記の後の「クビル」は、どの諸本にも見当たらなかった。

⑳ 一(調) 諛：タハフレ へ上上上濁上 遊 (八三頁7行目)

【本文】五嫂曰向來調諛無處不佳

【陽】五嫂か曰、向來調諛ノタハフレ處ト(シ)て佳カラ不といふこと無。

【真】五嫂か曰、向來調諛ノタワフレ處ト(シ)て佳カラ不云こと無シ。(二九ウ2)

【醒】五嫂か、曰、向來調諛處トシテ佳カラ不トイフコト無シ。(四一右1)

⑳ 譏一(警) ソヘコト へ平平平平 遊 (八五頁5行目)

【本文①】五嫂遂向菓子上作譏警曰

【陽】五嫂、遂に菓子の上に向(ヒ)機警を作(リ)て曰、

【真】五嫂、遂に菓子ノ上に向譏警ヲ作て曰ク (二八ウ3)

【醒】五嫂、遂に菓子の上に向(ヒ)譏警(ト)ソヘコトヲ作て曰ク (三〇右3)

【本文②】下官咲曰十娘機警異同着便

【陽】下官咲て曰十娘の機警異同とハナハタシクシトカタラヒ便りに着ク(ツキく)シ。(二二オ3)

【真】下官、咲て曰、十娘機警ノソヘコトス。異同トハナハタシク便りに着ク。(三四オ4)

【醒】下官、咲て曰(ク)、十娘機警とソヘコトス、異同トハナハタシク「カタ、カヒテ」着ク便ニ。(三五左3)

【金】下官、咲て曰(ク)、十娘機警とソヘコトス、異同トハナハタシク「カタ、カヒテ」着ク便ニ。(二五オ3)

※『大漢和辞典』に「機警」は「機知があつてさとい。物事に悟

りの早いこと」とある。「ソヘコト」は、「諷へ言」で、原田芳起氏は、「『そへ』は『よそへ』と同義。よそへていう言葉の意」とされる（『小学館古語大辞典』補注）。①はその意である。一機知にあふれた、当意即妙なことば」或いは「軽妙な冗談。洒落」の意であろう。

② 語：イフ へ上平 易 カタラク へ上上上 記 コト へ 平 選 サヘツリ へ上上上濁上 遊 (九〇頁下段)

【本文】朝聞鳥鵲語

【陽】朝、鳥、鵲の語「サヘツリ」を聞(ク)に、 (二五ウ6)

【真】今朝鳥、鵲ノマラウトカラスノ語を聞、ツルに、

【醒】朝鳥、鵲のヒトカラスノ語を聞、ツル。 (二七右6) (二二オ1)

※内田氏「諸本に同訓をみない」とされたのは見落としか。

※カササギの語る言葉、すなわち鳴き声なので「囀り」と訓んだもの。

③ 談：カタル へ上上 遊 カタラフ へ上上上 切 (九〇頁4行目)

【本文①】弱體、輕身 談之不能備盡

【陽】弱キ體、輕キ身、之(ヲ) 談ルトも備に盡すこと能(ハ)

【真】弱キ體、輕キ身、之(ヲ) 談ルトも備に盡すこと能不(ハ)

【醒】弱キ體、輕キ身、之(ヲ) 談ルトも備に盡すこと能不(ハ)

(二二ウ5) (五右6)

【醒】弱キ體、輕キ身、之を談ルトも備サニコトく、盡ルコト能不(ハ)

【本文②】談之不能盡

【陽】之(ヲ) 談ルに、盡すこと能不(ハ)

【真】之(ヲ) 談ルトも、盡すこと能不(ハ)

【醒】之を談ルモノ盡すこと能不(ハ)

【本文③】明日在外談導

【陽】明クル日に外處に在(テ) 談導ハマク、 (二六オ2)

【真】明ケン日外に在(テ) 談導ハマク、 (二七左2)

【醒】明クル日に外に在(テ) 談導、 (二九オ5)

※「談」字は三例あるが、本文①もしくは②からの拮集と見てよ

④ 戲語 タハフレコト へ上上上濁上 遊 (九〇頁7行目)

【本文】十娘曰、五嫂向來戲語、何須漫拍

【陽】十娘曰、五嫂、向來、戲語す。少府、何ソ須ク漫拍トオ

【真】十娘曰、五嫂、向來、戲語トハフレコトス。 (二七オ1)

【醒】十娘曰、向來、戲語トハフレコトス。 (二八左1)

【醒】十娘曰、向來、戲語トハフレコトス。 (二二ウ5)

※凶書寮本の標出語は「戯語」で、これと一致するのは「陽」のみ。岩波文庫（今村・153頁）に、「劇語」は、唐代の俗語である。戯語の語をいう。ジョーク、冗談のたぐい」とある。

⑤ 大（語） コワタカ（平平上上）同 （九〇頁7行目）

【本文】 五嫂大語嘖曰

【陽】 五嫂、大語にて嘖て曰、 （二四〇4）

【真】 五嫂、大語二嘖曰 （二五左4）

【醒】 五嫂、大語とコハタカニシテ嘖りて曰 （二七ウ8）

※土左日記の「こよひ、かかることとこわたかにもものもいはせず」（三月一六日）の例が知られている。

⑥ 足：公云音趣 タス（上平） フモト（上上上）詩 ユク

（上平）遊 アク（上平）集 ユタカナリ（上上平〇〇）

（二〇二頁2行目）

【本文】 聊以當兒心 竟日承君足

【陽】 聊に以て兒か心に當（ル） 竟、日に君か足を承ケヨ ヨロ

コフ （四七ウ6）

【真】 聊以て兒か心に當ツ 竟、日に君か足を承ケヨ。

（四九右5）

【醒】 聊（二）以て兒か心に當ツ。 竟、日に二君か足カムを（アシ

ヲ）承ケム（ケヨ）。（三四ウ7）

【金】 聊ニ以兒か心ニ當ツ 竟、日に二君か足ヲ承タム（ウケヨ）。

（四九・4）

*張郎が「相思枕」を記念に贈った返礼として十娘が「雙履」を贈って歌った一節であるから、「この靴は、一日中あなたの足を支えよ」と解するものだが、『醒』は「その靴を履いて行くことを支えよ」と解したものか。凶書寮本の訓と一致するのは『醒』だけである。

⑦ 疏：ウトムス（上上平平輕濁）論 エル（上上）月 券 ホ

ル（上上）集 ワカ後 オロソカナリ（上上平上平〇〇）遊

（二一八頁6行目）

【本文①】 【本文】 兒家堂舎賤陋 供給單疎（64） 参照

【陽】 兒か家は堂舎ノヤカス、賤陋トイヤシウシテ供給ノタテ

マツリモノ單疎（ト）オロソカナラむ。 （二ウ5）

【真】 供給ノタテマツリモノ單疎とヲロソカナリ。 （四右5）

【醒】 供給ノタテマツリモノ單疎とヲロソカナラン。 （二オ8）

【本文②】 五嫂曰娘子莫分疎

【陽】 五嫂曰、娘子、分疎トウタカフこと莫レ。 （二五ウ3）

【真】 五嫂か曰、娘子、分疎莫レ。 （二七右3）

【醒】 五嫂か曰、娘子、分疎とヲロソカ（ナルコト）とウタカフ

（コト）莫レ。 （二八ウ8）

【山】 五嫂曰、娘子、分疎トウタカフ莫レカシ（モノイヒソ）。

（②4）

※標出字「疎」に記入されているが、「疏」に記入されるべきものであることについては呉美寧氏（凶書寮本類聚名義抄における論語の和訓について「国語国文研究」116号）、拙稿（凶書寮

本類聚名義抄』所引「月令・月」の和訓について「国文学論考」40号)で論じたところ。

※本文①②、いずれも熟語の文選読みの一部で、どちらかという
と本文①から拮集した訓であろう

※本文②の「分疎」は、「辯解、訴説理由」の義(『敦煌變文字義通釋 増補定本』一八九頁)。八木沢「言いわけをする」(二〇八頁)、今村「弁解」(159p)と訳する。『山岸本』の「もの言ひそ」が適訓か。『遊仙窟鈔』は、「疎分ハウタガフト付タリ。コレハ文成ガ心八十娘ニアリ。ソレヲ十娘ウタガフトコトナカレ」(下・二十二才)と解く。

㉞ 舉止 ツキくシ(平平○○)遊 (二三三頁2行目)

【本文】實是人間斷絶人 自然能舉止 可念無比方

【陽】實是、人の間に斷絶レたる人なり。自然に、能、
舉止トフルマフ可念トアハレなる、比、方フヘキこと無。

(二五才2)

【真】實に是人間に斷絶レタル人なり。自然ニ能舉止フト(き)
には比フル方無(キ)ことを念フ可シ。(二六左2)

【醒】實に是、人間に斷絶トタヘスタレタル(ナリ)。人、自然
とヲノツカラに、能ク舉止トフルマフ。比、方無(キ)コ
トヲ可念トアハレニ、(二一才8)

【金】實に是人間に斷絶レたる人自然とヲノツカラに能舉止ト
フルマフ、可念トアハレ(二)比フヘキ方無(四48・5)

※「舉止」はテキストにこの一例のみ。現存点本に「つきづきし」と訓むものなし。「ふるまふ」は註文の「行坐風流也舉謂動也止息也任也」によるか。

㉞ 不(能) イナトナラハ(平上○○○○)遊 (二三三頁4行目)

【本文】五嫂曰娘子不能新婦自取

【陽】五嫂曰、娘子、能カラ不ハ「イナトナラハ」、新婦、自取らむ。(二四ウ4)

【真】五嫂か曰、娘子、能ハ不。新婦自「不」取む。(二六右4)

【醒】五娘か曰、娘子、能カラハ、新婦自に取ラレム。(二八才6)

※テキストに「不能」という文字連続は十二例あり、内田氏は「対応を限定できない」とされるが、図書寮本の訓と一致する『陽』の左訓からこの箇所と限定してよいだろう。「あなたが張さまをいらぬのなれば、わたしがもらいます」(八木沢・一〇六頁)は『陽』『醒』の、「奥様ができないなら、わたしがものにするわよ」(今村・47p)は『真』の訓による解釈にあたる。訓読からは「否とならば」が文脈に適した訓みと言えよう。

㉞ 寸(歩) タ、スム(平上濁平)遊 (二三三頁6行目)

【本文】閨中面子翻羞出 如今寸歩阻天津

〔陽〕 閨の中の面^ミ子ノカホハセは翻^カりて出^イむことを羞^ハツ。如^イ今^マ、

寸^サ歩^フトタ、スムとき、天^{アマ}津^ツを阻^ヘテたり (七ウ5)

〔真〕 閨の中の面^ミ子ハ翻^カて出^イむことを羞^ハツ。如^イ今^マ寸^サ歩^フとタ、スム

テ天^{アマ}津^ツを阻^ヘテ、 (九右6)

〔醒〕 閨の中の面^ミ子ノカホハセハ翻^カて出^イテんことを羞^ハツ。如^イ今^マ寸^サ歩^フとタ、スムトキ天^{アマ}津^ツを阻^ヘツ。天^{アマ}津^ツ(ヲ)阻^ヘタリ

(六オ4)

〔本文〕 兩^{フタ}歳^{トセ}梅花^{ウヅメ}匝^メ 三^ミ春^{ハル}柳^{ヤナギ}色^{イロ}繁^シ

〔30〕 兩^{フタ}一^{ヒト}(載) フタトセ 上^ウ上^ウ上^ウ遊 (一三四頁1行目)

〔陽〕 兩^{フタ}歳^{トセ}梅^{ウヅメ}花^{ハナ}、匝^メル。三^ミ春^{ハル}に柳^{ヤナギ}の色^{イロ}、繁^シ。 (三六ウ6)

〔真〕 兩^{フタ}歳^{トセ}に梅^{ウヅメ}華^{ハナ}匝^メル「アマネシ」、三^ミ春^{ハル}に柳^{ヤナギ}の色^{イロ}繁^シ

(三八右5)

〔醒〕 兩^{フタ}歳^{トセ}、梅^{ウヅメ}花^{ハナ}匝^メリ 一^{ヒト}ル、三^ミ春^{ハル}に柳^{ヤナギ}の色^{イロ}繁^シ。

(二七オ1)

〔山〕 兩^{フタ}歳^{トセ}、梅^{ウヅメ}花^{ハナ}、匝^メル 三^ミ春^{ハル}に柳^{ヤナギ}の色^{イロ}、繁^シ。 (38・6)

〔密〕 キヒシ 平^{ヘイ}平^{ヘイ}濁^{ダク}上^ウ 詩^シ タシカナリ 平^{ヘイ}上^ウ平^{ヘイ}〇〇月^{ツキ}ヒ

ソカニ 平^{ヘイ}上^ウ〇〇〇〇記^キ シノヒヤカナリ 平^{ヘイ}平^{ヘイ}平^{ヘイ}濁^{ダク}上^ウ〇〇

〇〇遊 (一三七頁7行目)

〔本文〕 自^ミ恨^ミ往^ウ還^エ疎^ソ 誰^{タレ}肯^{ケン}交^{カウ}遊^ユ密^ミ

〔陽〕 自^ミ(ヲ)恨^ミ(ム) ラクは往^ウ還^エする^スこと^{コト}の疎^ソらむ^ムこと^{コト}を、誰^{タレ}

か肯^{ケン}へて交^{カウ}はり遊^ユ(フ) こと^{コト}の密^ミからむ^ムシノヒヤカナラ

ム。 (七ウ3)

〔真〕 自^ミ恨^ミラクは往^ウ一^{ヒト}還^エトサマヨヒ 一^{ヒト}へリ 疎^ソクナラムこと

を、誰^{タレ}か肯^{ケン}へて交^{カウ}遊^ユフコトの密^ミカラシ。 (九右4)

〔醒〕 自^ミ(ヲ)一^{ヒト}往^ウ還^エルコト疎^ソキこと^{コト}を恨^ミム、誰^{タレ}か肯^{ケン}へ

て交^{カウ}り遊^ユフコトノ密^ミシクセム。 (六オ1)

〔金〕 自^ミ往^ウ還^エとサマヨヒて疎^ソクナラム(コトヲ)恨^ミム、誰^{タレ}か肯^{ケン}へ

て交^{カウ}遊^ユとマシハリアソム(コトノ)密^ミヤカニシタシカラ (四23・2)

※「密」字は五例。「親し」「睦まし」「厳し」などと訓む中で、「忍びやかなり」と訓むのは『陽』と『金剛寺本』のこの箇所だけである。

〔33〕 圍^イ碁^イ 順^ス云^ク音^{オン}期^キ 字^ジ亦^オ作^ス碁^イ 此^コ間^{カン}云^ク五^イ 舜^ス造^{ゾウ}也^{ナリ} 一^{ヒト}借^カ声^{セイ}為^シ 違^チ期^キ遊^ユ 玄^{エン}賛^{サン}云^ク如^ニ俗^{ゾク}觀^{カン}一^{ヒト}斧^ボ打^チ便^{ベン}爛^{ラン} (一四八頁4行目)

*「圍」字は、補入した文字である。『倭名類聚抄』からの引用による標出字ならば、単なる脱字を修正したものである。

○註文から引用した語句である。 〔刊〕 何^{ナニ}用^{ヨウ}數^{スウ}圍^イ碁^イ 〔圍^イ碁^イ借^カ聲^{セイ} 五^イ嫂^{セウ}詠^{エイ}曰^ク 娘^{ニヤウ}子^シ為^シ性^{セイ}好^{コウ}圍^イ碁^イ 為^シ違^チ期^キ也^{ナリ} (三八ウ2)

〔山〕 〔圍^イ碁^イ即^ス借^カ聲^{セイ} 五^イ嫂^{セウ}詠^{エイ}曰^ク 娘^{ニヤウ}子^シ為^シ性^{セイ}好^{コウ}圍^イ碁^イ 為^シ違^チ期^キ也^{ナリ} (153)

※『遊仙窟鈔』(卷四・3オ)に「五嫂云ヤウ、十娘ハ、ムマレツキ、圍^イ碁^イヲコノム。人^{ヒト}ニ逢^{アウ}テ違^チ期^キヲコノムトハ、圍^イハ違^チノ字ニトリ、碁^イハ期^キノ字ニトル。期^キハチギリトヨム。違^チハタガウト

ヨム。圍期ヲコノムト云コト也。十娘ハタゞ、チギリヲタガユルコトヲ、コノム人也」とこの註文を説明している。

③料一(理) シツラフ(平平上平)遊 (二六〇頁2行目)

【本文】喚桂心曰 料理中堂 將少府安置

【陽】桂心を喚て曰、中堂を料理トシツラ(ヒ)少府を將(テ)安_レ置セヨ。

【真】桂心を喚曰、中堂(ヲ)料理(ト)トリシツラヒ少府を將(キ)テイリ(一)安_レ置カシメヨ。

【醒】桂心を喚て曰ク、中堂に料理トシツラヒ、小府を將(キ)一ヒキ_一テ安_レ置セシメヨ。

【金】桂心を喚て曰 中堂に料理ヒ(一)ミマシ、キ(一)少府を將(テ)安_レ置トイマセヨ。

※「料理」は《飾りつける。ふさわしく配置する》の意だが、ここでは《整える。支度する》の意と解される。『醒』『金剛寺本』が「に」格をとるのは「將キル」に係らせるためか。『金剛寺本』の別訓「御坐敷き」なら「に」格を承ける。

⑤ 玲瓏 類云零音 下音籠 弘云玉有龍文也。季云一玉声。一トナル(〇上平) 選 カ、ヤイテ(上上上平上)遊 (二六一頁6行目)

【本文】雲母飭窓 玲瓏映日

【陽】雲母ノキラ、窓を飭れる窓、玲瓏トテリて日に映ク(カ、ヤク)。

【真】雲母ノキラ、窓を飭て、玲瓏とカ、ヤイテ映日トヒラメク(カ、ヤク)。

【醒】雲母ノキラ、窓を飭て、玲瓏とカ、ヤイテ映日トヒラメク(カ、ヤク)。

【金】雲母ノキラ、窓を飭て、玲瓏とカ、ヤイテ映日トヒラメク(カ、ヤク)。

⑥ 希望 音亡：口傳云平ノソム(上上上濁平)去ノソミ(上上上濁上)ノソムシニ(上上上濁上上〇)選 ウラム(平平上)詩ワスル遊 (二六九頁1行目)

【本文】誠如所言 不敢望徳

【陽】誠に言フ所の如キは、敢て徳を望レ不。

【真】誠に言(フ)所の如(キ)は、敢て徳を忘レ不。

【醒】誠に言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

【真】雲母のキラ、窓を飭レル窓、玲瓏とテリて日に映ク。

【醒】雲母のキラ、窓を飭レルこと、玲瓏とテリて日に映ク(カ、ヤク)。

【金】雲母ノキラ、窓を飭て、玲瓏とカ、ヤイテ映日トヒラメク(カ、ヤク)。

※池田幸恵氏(『金剛寺本』『遊仙窟』の本文と異本注記)訓点語と訓点資料 第一〇八輯)により指摘されている例だが、図書寮本に一致するのは『金剛寺本』だけである。

※佐竹昭広氏(『古語雑談』岩波新書)が『万葉集』巻第十一・二二九一番歌の「玉響」を「たまかぎる」と訓むため、音と光の二系統の訓を持つ類例として観智院本(法中・一〇ウ2)《ナカ、ヤク》は「トカ、ヤク」の誤写)から引用されたが、図書寮本によりその和訓の出自と文脈が明らかになるものである。

⑦ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑧ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑨ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑩ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑪ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑫ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑬ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑭ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑮ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑯ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑰ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑱ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑲ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

⑳ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

㉑ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

㉒ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

㉓ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

㉔ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

㉕ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

㉖ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

㉗ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

㉘ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

㉙ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

㉚ 誠言(フ)所の如(キ)ハ、敢て徳を望レ不。

(一四才3)

※白藤氏は「今伝わる本文には見られない」とされた例だが、「望」字は全五例用いられていて、他の四例は「のぞむ」の意だが、ここは註文(無刊記本・二七才)に、『漢書・高帝紀』を原拠とし同文であること、さらに「望・忘也」と字注を記している。『真』は註文に惹かれたものか「忘」字にしてしまっている(八木沢・八六頁「余説」参照)。『大漢和辞典』などは「忘也」の意は記されていない(『敦煌変文字義通釈』に「望」は「忘」に通ずるとあるという(今村・151p)。「ワスル」に声点を加えられていないのは特殊な訓だからということであろうか。

㊦(都) 廬 シカシナカラ 遊 (二七九頁5行目)

【本文】遮三不得一 覓兩都廬失

【陽】三ツを遮ラは一をモ得不。兩を覓は都廬失(ヒ)てむ。(二五ウ2)

【真】三を遮ラは、一をタニモ得不。兩を覓メハ都廬フツニ、失(ヒ)テム。(二七右3)

【醒】三ツを遮ラム。一ツタモ得不。兩ツを覓メハ都廬失(ハム)。(一八ウ8)

※註文に「都廬者・物盡意也。是俗語也」(無刊記本・三四才)

とあり、『時代別国語大辞典 上代編』に「廬」は語尾に添える助字、「都」(すべての意)に同じ」とある。『大漢和辞典』

(二一・二八五頁)には「佛教語」として「すべてといふ意」で『碧巖録』を引いている。「佛教語」というのは引用文献に引かれすぎたものだろう。

今村氏が「シカシナガラは、一見、的をはずれているようだが、「都廬」が「総共」と同義であり「総」に、「雖」の意味があることからみて、的からそうはずれていない(159p)とされるのは、「シカシナガラ」を逆接の接続詞と考えての言い方で、『日本国語大辞典』の「しかしながら」の補注に「「しか」は副詞、…訓点語系の格式ばった散文用語で、古代では「ながら」の方に、後世では「しかし」の方に、意味の重点がかかっている」とあるように、「さながら」と同じ意である。副詞「ふつに」については、坂詰力治氏の御論(『文学論藻』第54集)がある。

㊧横(陳) ソヒフス(上平平上) 遊 (二〇三頁5行目)

【本文】合香横陳 何曾愜意

【陽】香を合せ(合香)トムツマシ(横)陳セシかとも何(ソ)曾(テ)一ス(なはち)意に愜ハむ。(五才5)

【真】合香トムツマシク、横陳トソヒフシ、カトモ 何ソ曾テ意に愜ハム。(六左6)

【醒】合香とムツマシク横陳トソヒフシ、カトモ(フセリトモ)何ソ(イカハカリソ)曾(スナハチ)意に愜ハム。(四才6)

※「横陳 ソヒフシ」が、『源氏物語』桐壺の古注に用いられて

から中世の古辞書への流れについては、安田章氏『国語史の中世』(三省堂・三一五頁)に詳しい。

③ 端一(坐) ヒトリキ 平平平平 遊 ウルハシクキル 平平 平上平上平 (二一九頁5行目)

【本文①】端座刺心驚 愁來益不平

〔陽〕端座トウスキにて刺チ、心驚ク、愁へ來て、益、不平シ。

(七オ6)

〔真〕端座トウスキニシテ刺チ意驚ク、愁來て益く不平トナヤマシ。

(九右1)

〔醒〕端座トウスクマリタレハ刺へ、心驚ク、愁、來レハ一タ

テ益く不平(ト)ナヤマス一ナヤマシキことを

(五ウ7)

〔金〕端座とウルハシクキテ一ウス〇ニシテ

(図22・5行目)

【本文②】端座横琴 涕血流襟

〔陽〕端座に琴を横レハ、涕と血と襟に流ル

(五一オ3)

〔真〕端座トウスキニシテ琴を横(タ)へ涕血襟に流ル。

(五二左2)

〔醒〕端座とシテ琴を横タへ、涕血襟ノクヒに流ル。

(三七オ4)

〔金〕端座とヒトリキテ

(図59・4行目)

※池田幸恵氏(③)に既引の論文)は②について、図書寮本と『金剛寺本』のみが一致することを指摘されているが、図書寮本の和訓の掲出及び出典表示の仕方からは「ウルハシクキル」も遊仙窟出自の訓と考えられ、これも『金剛寺本』だけに一致するものである。

①《じつとしていると》(今村・18p)の意だと「うずる」「うづくまる」でも良いが、「端座」の意味から、あるいは《正座すれば》(八木沢・五二頁)からは、金剛寺本の「ウルハシクキル」が適切な訓と思われる。出典注記「遊」が次の訓にも掛かるものと認められる例である。

②《：琴を横たえ、血の涙が胸もとに流れ、さまざまに思いがわき起こり》(今村・103p)の文脈で解すれば「ヒトリキテ」と読めないこともない。意識による訓であろう。

④ 紫一(塩) 遊仙窟云河東紫一(塩)嶺南丹橘

(二三五頁4行目)

【本文】河東紫塩 嶺南丹橘

〔陽〕二七オ2 〔真〕二八左2 〔醒〕二〇オ1

※遊仙窟の本文からの引用で、ご馳走として出された山海の珍味の一つである。『図書寮本類聚名義抄』で、「白一・黒一」などは『倭名類聚抄』から、「大一」は『本草和名』からと、「塩」の種類を列挙した中の一つとして引用されたものである。註には「廣志曰北胡中青塩、五原有紫塩。塩色紫也」(無刊記本・三五ウ)とある。

(41) 關一(情) コ、ロツキ遊 (二三七頁5行目)

【本文①】眼細強關情 廻身已入抱 不見有嬌声

【陽】眼細て強に關情なり。身を廻已に抱に入 嬌たる声有ことを見不。 (一九才3)

【真】眼細て強に情に關へり。コ、ロツキナリ。身を廻て已に入レヌ。見不、嬌ヒタル声有(ル)ことを。(二〇左4)

【醒】眼細クシテ強チに關情なり。コ、ロツキへ〇〇〇平濁平〇、身を廻(ラ)シ已に抱に入ル、嬌(キ)タル声有(ル)ことを見サ不。(一四才6)

【本文②】天生素面能留客 發意關情併在渠

【陽】天は、素面を生シ能、客を留む。意を發シ關情なること併渠 在 (二二ウ3)

【真】天、素面を生シ能(ク)客を留ム。意を發シ關情トコロツキナルコト併渠在。(二三右4)

【醒】天、素面を生シテ能(ク)客を留ム、意(ヲ)發キ、關情とコ、ロツキナル、併(ヒ)に渠ミミイトコロ一に在(リ) (一六才3)

※「關情」という熟語は二例である。いずれにも「ココロツキ」の訓を加えている。本文①は琵琶を抱いて十娘の心情に喩えて《男の気を惹く》、本文②は箏を題材に十娘の心情を《情を掛ける》と詩に読んだもの。「心付き」で《心惹かれる。氣に入る》意にあたる。

(42) 無一(情) アチキナシ 平平濁平平平輕 同 (二三七頁6行目)

【本文①】無情明月 故故臨窓

【陽】無情キ明月ノミソ故故トネタマシカホに窓に臨メル(メ)り。 (六ウ2)

【真】無情トアチキナク、明月ノハレタルは故々トネタマシカホニ窓に臨、 (八右3)

【醒】無情とアチキナキ明カナル(アカツキノ) 萱(月は、) 故とネタマシカホニ窓に臨り。 (五才5)

【本文②】蜂子太無情 飛來踏人面

【陽】蜂子、太情無シ(アチキナシ) 飛來て人の面を踏ム。 (三八才2)

【真】蜂子、太々情無(シ) 飛來て人面を踏ム。 (三九左1)

【醒】蜂子太々情無シ 飛來て人ノ面を踏ム。 (二七ウ7)

※形容詞「あぢきなし」は、《こちらの気持ちを解さない、反映しないと感ずることによるむなしさま、つまりないさま》の意。「遊仙窟」では、他に「多事」「無事」「無端」(元龜二年本運歩色葉集に「何須 遊仙窟」258pとあり、「何須」は本文に七例あるが、そう訓んでいる点本はない)を訓んでいる。『色葉字類抄』には「無為」「無事」「無端」「不用」を、『今昔物語集』では「無端」を用いているが、節用集諸本では出典を『史記』とする「無為」が主で、新たに当て字の「味氣」が、永禄二年本・弘治二年本・高野山本・経亮本・永禄五年本・枳園本

など印度本系に現れる。

(43) 天^一(性) ヒト、ナリへ上上上上遊 (二三七頁7行目)

【本文①】資質天性有 風流本性饒

〔陽〕資^一質ノムクロ一スカタ^一は天^一生に有り 風流トミヤヒカ
なる本^一性饒なり。 (四〇才6)

〔真〕資^一質ノスカタハ天^一性に有り、風流ノミヤヒカナルハ、體^一
性饒なり。 (四一左5)

〔醒〕資^一質ノスカタは天性に風流ノミヤヒカナルコトハ本性
饒ナルニ有り。 (二九ウ1)

【本文②】妍華天性足 由来能装束

〔陽〕妍華トウルハシク、天^一性、足れり。 由来、能、装束せ
り。 (四〇ウ2)

〔真〕妍華トウルハシキ本^一性足ニシテ一タレリ一 由来一ムカシ
ヨリ一能ク装束ヒ束ネタリ。 (四二右1)

〔醒〕妍華トウルハシキコト天^一性足レリ。 由来一ムカシヨリ一
能、装束セリ。 (二九ウ3)

※テキストに「性」を「ヒトトナリ」(『陽』18才3、『真』19左

3、『醒』為性 ヒトトナリ 22才1)と訓んだものはあるが、
熟語「天性」(二例)を「ヒトトナリ」と訓じたものはない。

本文①も②も『生まれつき』の意だから「ひととなり」と訓ん
でもよく、図書寮本の編者はそのような訓点本を用いたもので
あろうか。

(44) 忿怒 弘云字粉反 … ネタムへ平平上遊 ココロヤム
(二四二頁6行目)

【本文①】今宵獨臥實忿更長

〔陽〕今宵獨臥て實に更^一の長キことを忿ム 覺イ。 (五才6)

〔真〕今宵、獨臥テハ實に更長(キ)ことを忿ム (七右1)

〔醒〕今宵獨(リ)臥(シ)て實に更^一の(ヨノ)長(キ)ことを
忿ム。 (四才7)

〔金〕今宵獨り臥ては實に更^一の(ヨノ)長キことを覺む(コ、ロ
ヤム 怨イ本ウラム) (図13・3行目)

【本文②】忿秋胡之眼拙枉費黄金

〔陽〕秋胡か(シ)眼の拙シテ枉ケテ黄金を費^一ことを忿 (一才カ)
ル (六才3)

〔真〕秋胡カ(シ)眼拙シテ枉(ケ)テ黄金を費^一ことを忿 (一才カ)
ル (七左4)

〔醒〕秋胡之眼の拙ク枉ケテ黄金を費^一ことを忿 (四ウ8)

〔金〕秋朝(ノ)眼ノ拙クテ枉ケテ黄金を費^一ことを忿ム
(図18・1行目)

※標出語「忿怒」は何によるものか不明(大般若経か)。内田氏
「諸本に該当字なし」とされるのはいかなる理由か。『遊仙窟』

本文にはないが註文に「毎照鏡忿怒」(刊本・九ウ5)とある
ところ、『金剛寺本』(図一六・5)は「忿」一字である。図書
寮本では上字下字で説明していて、ここは上字について記され

た訓だから本文①でも②でもかまわない。①は、「ウラム」或いは「ココロヤム」と訓む。②を「ネタム」訓むのは、池田幸恵氏(45)に既引の論文)のご指摘のように、『金剛寺本』だけである。これも出典注記「遊」が次の和訓にも及ぶ例である。独り寝の夜の長さを「恨む《不満に思う》」か、「心病む《辛いと思う》」か、つまらない女に黄金を与えたことを「妬む《悔しいと思う》」か、いずれもそれぞれの文脈を捉える範囲内の訓みである。

(45) 倭惜 慈云力晋反：・下弘云胥亦反：タハフ(上△平)集 アタラシカル(上上上上上濁平) ヲシム(平平上)後
 ーイナフ(平平上濁)遊 (二五五頁一行目)

【本文】 兒家堂舎賤陋 供給單疎 只恐不堪 終無倭惜
 【陽】 兒か家は堂^{ウラ}舎^カノヤカス、賤^チ陋^ロトイヤシウシテ供^ケ給^ケノタテマツリモノ單^ヒ疎^ト(ト)オロソカナラむ。亦恐クは堪(ヘ)不^サレとも、終に倭^ワ惜^チフルこと無(カ)らむことを。(二ウ5)
 【真】 只恐は終に倭^ワ惜^チとイナフルコト無(カ)ランことを堪(ヘ)不^サ(レ)トモ一ムコトヲ、 (四右6)
 【醒】 兒^{ワカ}家^カ堂^{ウラ}舎^カノイホリ賤^チ陋^ロトイヤシウシテ供^ケ給^ケノタテマツリモノ單^ヒ疎^トとヲロソカナラン、只、恐クは堪(ヘ)不^サ(ラ)むことを、終に倭^ワ惜^チとイナフルコト一ヲシムコト一無(カ)ラム (二オ8)

※疲れたので休ませてくれという申し出に對し、女はことわるわ

けにもいかなないと答えた言葉。バ行上二段活用「否ぶ」である。「倭」は「吝」の俗字。

(46) 莫一(惜) サマラハレ(平平上平濁平)遊(二五五頁一行目)

【本文】 徑須剛捉著 遮莫造精神
 【陽】 徑に須(ら) ク剛^{アチカ}チに捉^トリ著^ツク「須」シ。遮^{サモラ}莫^{ハアレ}精神を造^ナサむ。(四一ウ5)
 【真】 徑に須(ら) ク剛^{アチカ}チに捉^トリ著^ツク「須」シ。遮^{サモラ}莫^{ハアレ}精神のタマシヒを造^ナサム。(四二右4)
 【醒】 徑^タ、須^ラ(ら) ク剛^{アチカ}チに「シヒテ」捉^トリ著^ツク「須」シ。遮^{サモラ}莫^{ハアレ}「アチキナシ」精神を造^ナセ(二ナ)サム。(三〇ウ1)

※問題点は二つ。i 標出語と本文とで文字が異なる。ii 訓の語形の一致するものがないとともに他例を見ない語形である。

i 「莫惜」という熟語は『大漢和辞典』にない(九・六八五頁)。八木沢元氏は『俗語』とされる(『遊仙窟全講』一六七頁)。「觀智院本類聚名義抄」には、「莫惜 サマラハレ」(法中78)、「遮 サマラハレ」(佛上58)の他に、「遮莫 サモアラバアレ」(佛上58・僧上2)と遊仙窟の本文及び訓と一致するものもある。

ii 関連の語の

・さにはあれ↓さむばれ(堤中納言物語・はなだ) ↓さばれ

(蜻蛉日記・源氏物語・宇治拾遺物語)

・さはあれ↓さはれ(和泉式部日記)

・さもあれ (宇治拾遺物語) ↓さまれ (名語記・ロドリゲス日
本文典・閑吟集)

・さもあらばあれ (伊勢物語・宇津保物語・和泉式部日記・拾
遺集・山家集)

↓さまらばれ (榊原本和泉・図書寮本類聚名義抄)

↓さまればれ

などは、小松英雄博士のいう「慣用句から慣用語への転換」し
た語であるが、この「サマラバレ」も「音声的語形の書記」
〔徒然草抜書〕 274 p (講談社学術文庫 947) になる、辞書の訓
としてはめづらしいものである。

④ 可一 (怜) ウツクシムス (平平平上平平軽濁) 遊

(二五五頁6行目)

【本文①】可^カ怜^{レイ}嬌^カ裏^カ面^カ

〔陽〕可^カ怜^{レイ}ト^トウツクシケ^ケなる^ナ嬌^カの^ノ裏^カの^カ面^カ (九才4)

〔真〕可^カ怜^{レイ}ト^トウツクシケ^ケナル^ナ嬌^カの^ノ裏^カの^カ面^カ (二〇左4)

〔醒〕可^カ怜^{レイ}ト^トウツクシケ^ケナル^ナ嬌^カ一^コエ^ケホ^ホノ^ウ裏^カの^カ面^カ (七才4)

〔金〕可^カ怜^{レイ}ト^トウツクシケ^ケ嬌^カノ^カ裏^カノ^カ面^カ (図28・4)

【本文②】副^ソ着^ツ可^カ怜^{レイ}心^{シン}

〔陽〕可^カ怜^{レイ}なる^ナ心^{シン}に^ニ副^ソヒ^ヒ着^ツケ^ケリ。 (二八ウ2)

〔真〕可^カ怜^{レイ}ナル^ナ心^{シン}に^ニ副^ソヒ^ヒ着^ツケ^ケヨ。 (三〇右2)

〔醒〕可^カ怜^{レイ}ナル^ナ心^{シン}に^ニ副^ソヒ^ヒ著^ツケ^ケリ。 (二一才2)

〔山〕可^カ怜^{レイ}なる^ナ心^{シン}に^ニ翻^フ着^ツす。 (⑪6)

【本文③】正^{ウツクシケ}値^ケ可^カ怜^{レイ}花^カ

〔陽〕正^{ウツクシケ}に^ニ可^カ怜^{レイ}なる^ナ花^カに^ニ値^ケへ^リ。 (三八才5)

〔真〕正^{ウツクシケ}に^ニ可^カ怜^{レイ}ナル^ナ花^カに^ニ値^ケへ^リ。 (三九左4)

〔醒〕正^{ウツクシケ}に^ニ可^カ怜^{レイ}ナル^ナ花^カに^ニ値^ケへ^リ。 (二八才1)

【本文④】暫^{ウツクシケ}借^ケ可^カ怜^{レイ}腰^カ

〔陽〕暫^{ウツクシケ}、可^カ怜^{レイ}なる^ナ腰^カを^ヲ借^ケシ^シハ^ハむ^ム借^ケラ^レレ。 (四二才1)

〔真〕暫^{ウツクシケ}ク、可^カ怜^{レイ}ナル^ナ腰^カを^ヲ借^ケラ^レむ。 (四三右6)

〔醒〕暫^{ウツクシケ}、可^カ怜^{レイ}ナル^ナ腰^カヲ^ヲタ^タモ^モ借^ケラ^レム^ム一^コセ^セむ。 (三〇ウ3)

※テキストに「可怜」は四例あるが、すべて連体修飾語として状
態を表していて、「ウツクシムズ」と動作性で訓む本文はない。
「うつくしみます」の撥音化した語であろうが、築島裕博士の
『訓點語彙集成』(汲古書院刊)にも登載されていない。

④ 不^カ愜^ケ 音^カ箇^ケ … カナフ (平平上) 集 タカフ (平平濁上)

タシカ (平上平) 遊 マカス (二二六七頁5行目)

【本文①】合^カ香^ケ横^カ陳^ケ 何^カ曾^ケ愜^ケ意^ケ

〔陽〕香^カを^ヲ合^カセ^セ一^コト^トム^ムツ^ツマ^マシ^シ一^コ横^カ陳^ケセ^セシ^シカ^カと^トモ^モ何^カ(^カそ)曾^ケ(^ケて)、
意^ケに^ニ愜^ケハ^ハむ。 (五才5)

〔真〕合^カ香^ケト^トム^ムツ^ツマ^マシ^シク、横^カ陳^ケト^トソ^ソヒ^ヒフ^フシ、カ^カト^トモ^モ何^カソ^ソ曾^ケテ^テ意^ケ
に^ニ愜^ケハ^ハム。 (六左6)

〔醒〕合^カ香^ケと^トム^ムツ^ツマ^マシ^シク横^カ陳^ケト^トソ^ソヒ^ヒフ^フシ、カ^カト^トモ^モ一^コフ^フセ^セリ^リト^トモ、
何^カソ^ソ一^コイ^イカ^カハ^ハカ^カリ^リソ一^コ曾^ケテ^テス^スナ^ナハ^ハチ^チ一^コ意^ケに^ニ愜^ケハ^ハム。 (四才6)

【本文②】賦古詩…唯須得情 若不愜當 罪有科罰

【陽】古詩に云…唯須ク情を得「須」シ。若、愜に「カナヒ」當ラ

不は、罪、科、罰有らむ。(二〇ウ②)

【真】古詩に云…唯須情を得「須」シ。若愜ニ當ル「ニアラ」不

は、罪科、罰有ラむ。(二二右③)

【醒】古詩に云…唯須ク情を得「須」シ。若シ愜「ヒ」當ラ不

は、罪の科、罰有ラム。(一五オ⑥)

※引用訓「タシカ」は、『陽』『真』において本文②の訓として

「當る」の修飾語に用いられている。先述(39・44)のように、

出典注記「遊」を挟んで次の訓「マカス」も遊仙窟から引用し

た訓と考えれば、現存テキストにその訓を加えてあるものはない。

『金剛寺本』の欠紙が惜しまれる。意味的には、本文①に

該当するのではないかと思う。「何ぞ曾て意に愜せむ」と訓み、

《思うようになったことではない》と解釈できそうだ。

④9 煩一(惱) ナヤム(平上)遊 (二六八頁4行目)

【本文】元来不見、他自尋常、無事相逢、卻交煩悩

【陽】元、来より見不(ラ)マシかは、他モ、自モ、尋常ナラマシ

モノを、無、事ク相逢て、却て交煩悩トナヤマシムカシ。

(六ウ⑥)

【真】却へて交煩悩サント。

【醒】元、来見不(ラ)マシカハ、他モ自モ尋常トナラクアラマシ

(ツネナラマシ)、無事トアチキナク相ヒ逢フて、卻ミテ交

ヒ二煩悩す煩ヒ悩マス。

【金】煩悩トナヤムカナ (四二一頁1行目)

※テキストに「悩」は四例あるが、「煩惱」という熟語はこの一

例。『金剛寺本』だけが「なやむ」と自動詞に訓んでいる。

「交」《互いに》とあっても、古注に「却令我心更生煩惱」(金

剛寺本)と記すように《わが心をナヤマス》のだから、内容的

には「ナヤム」と訓んでも意味としては同じである。

⑤0 一(悠)々 トカスカナリ(平上)遊 (二七一頁1行目)

【本文】人去悠悠隔兩天

【陽】人去(ル)こと、悠々としてトハルカニシテ兩ツの天を隔

ツ。(五〇オ①)

【真】人去テ悠々トハルカニシテ兩ツの天を隔ツ。(五一右⑥)

【醒】人去テ悠々トシテ兩の天を隔ツ(テム)。(三六オ⑦)

【金】人去テ悠々トシテ兩ノ天ヲ隔。(四五六・4行目)

*この一例だけなので、この文脈に該当するはずだ。「仙家」と

「世間」(註文による)との距離をいう文脈なので「遙かにし

て」の意と思うが、その距離を隔てた遙か彼方の仙家を想った

ときの感じを捉えて「幽かなり」と訓読したものであろう。な

お、『大漢和辞典』(四・一〇六一頁)にはその意は記されてい

ないし、そう訓ずる点本もない。

⑤ 異一(常) ハナハタシ(上上上上濁平輕)遊

(二七八頁一行目)

【本文】山川阻隔 疲頓異常

【陽】山川阻隔、疲頓トツカレ異常トハナハタシ。

(二ウ3)

【真】疲トツカレタルコト異、常トハナハタシ。

(四右3)

【醜】疲頓トツカレタルコト異、常トハナハタシ。

(二オ5)

⑥ 非一(常) メツラシ(平平濁平平輕)遊 ハナハタシ(上上上濁平輕) アヤフシ(上上上平輕) (二七八頁一行目)

【本文】①行至一所險峻非常

【陽】行て一所に至に險峻トサカシウシテ非常トハナハタシ。

(一ウ5)

【真】行て一の所二至に險峻トサカシク非常トハナハタシ。

(三右6)

【醜】行て一ノ所に至ルに險峻トサカシウシテ非常トハナハタシ。

(一ウ4)

【金】(行至) 一所に險峻とサカ(シウシテ) 非常とアヤウシ。

(図3・1行目)

【本文】②玉饌珍奇非常厚重

【陽】玉の饌、珍奇トメツラカに非常トハナハタシウシ原ク重

(二七ウ2)

【真】玉の饌、珍奇に奇シク常に非(ス) 厚ク重シ。

(二七ウ2)

(二九右2)

【醜】玉の饌珍カニ奇シク非常(ト) ハナハタシウシテ厚重トメ

ツラカニシテ

(二〇オ7)

【山】玉饌・珍奇にメツラカニ非常ハナハタシクモ厚ク重シト

ニキハシ

(⑨4行目)

※テキストに「非常」の用例は二例。図書寮本に引く三訓のうち、「メツラシ」が見あたらぬ。平井秀文氏(『日本文学研

究」第十二号)のお考えのように、本文②において「珍奇」の

訓が紛れ込んだものか。

⑦ 布：玉云帛也幣也敷也製也：シク(上上平)遊

(二七八頁二行目)

※内田氏もいうように本文にも註文にも「諸本に該当字なし」。

ただし、訓としては珍しいものではない。

⑧ 細幔 音慢：カタヒラ(平平平濁平)遊(二八〇頁三行目)

【本文】兩頭安絲幔 四角垂香囊

【陽】兩ツの頭に絲の幔を安キ 四ツ角に香キ囊を垂(レ)たり。

(四〇オ1)

【真】絲の幔を安キ、

【醜】絲ノ幔を安キ、

(四一右6)

ノ幔を安キ、

(二九オ4)

※類聚名義抄の標出字は、巾偏「網幔」で、「陽」と一致する。

「両方の端に色絹のとばりを垂れる」（八木沢一五八頁）と解する
ように、「几帳の帷いとあざやかに」（『枕草子』内裏の局）の意である。

59 一（帳）子 遊仙窟云春着領巾秋着ウハオソヒ（上上上平）一（二八〇頁3行目）

※字順から見れば、省略字「一」には「慢」が該当するが、遊仙窟の本文から一字前の「帳」を承けたものと見た。すなわち配列が適切でない例である。

【本文】迎風帳子…〈單曰領巾袂曰帳子春黄着領巾秋着帳子…〉

【陽】風を迎（へ）ては、帳子のウハヲソヒ、（九ウ1）

【真】風を迎（へ）ては帳子のウハヲソヒ（二一右2）

【醒】風を迎（へ）てハ帳子のウチカケコロモ（七オ7）

【金】風に迎ては帳子ノウハヲソヒ鬱金（の）ウチカケ衣香アリ

〈單ナルヲハ領巾ト曰（フ）、袂ルヲハ帳子ト曰（フ）。

春ハ黄（ナル）領巾（ヲ）着ル、秋（ハ）帳子（ヲ）着

（ル）〉（図29・6）

※本文を引用しその傍訓形式としての引用である。本文は註文からであるが、『金剛寺本』には右引のようにあるが、「黄」字は図書寮本にも無刊記本（一五オ4）にも無い。ともかく、図書寮本類聚名義抄の編者が用いたテキストは有注本で、その註文にも加添されていたものである。内田氏は「單曰」とある箇所が引用されているからその現存有注本に先行する形態であつ

た可能性もある」とされるのは「單カ曰、領巾袂ヲ曰、帳子」という刊本の訓による誤解ではなからうか。

※「帳子」は婦人が肩から垂らす飾り布（シヨール）ということだが、「上襲」は上着で、『枕草子（大進生昌が家）』に大進生昌が「姫宮の御方の童の」柏のうはおそひは、何の色にかつかうまつらすべき」と申したところ、「また笑ふ、ことはりなり」とある。清少納言が、笑われるのはもつともだというその理由について、童女が柏の上に着るとしたら「汗衫」ということになるが、『春曙抄』は生昌が「汗衫といふべきを、柏のうはおそひ」といったので笑われたと注し、関根正直氏『枕草子集註』は「汗衫の正しき名を称ふるをも、聞き耳遠く古めかし」ということで嘲笑されたとする。また、萩谷朴氏『枕草子解釈の諸問題』では生昌の「田舎訛」のせいであろうとするなど帰結を見ない。

60 一（帛）子 ハハハラヒ（上上上上平）遊（二八四頁1行目）

【本文①】時將帛子拂 還捉和香燒

【陽】時に帛子を將（て）拂ヒ、還和香を捉ツて燒ク。

（四〇ウ2）

【真】時に帛子を將て拂ヒ、（四二右1）

【醒】時に帛子を將て拂ヒ、（二九ウ3）

【本文②】落金釧解帛子…皆送張郎曰

【陽】金の釧を落シ、帛子を解キ…皆、張郎に送（リテ）曰（ク）

（四九オ4）

〔真〕 帛子を解キ、 (五〇左3)

〔醒〕 帛子を解キ(ヌキ)、 (三五ウ5)

〔金〕 金ノ釧ヲ落テ、帛子ヲ解キ：皆張郎ニ送日 (函55・2)

※『金剛寺本』以外音読しているが、本文①は十娘の持ち物の「絹のハンカチ」、本文②は侍女たちの饞別として身に付けていた「絹の手ぬぐい」(八木沢一九三頁)、『倭名類聚抄』僧坊具の「白拂」(巻第五)、すなわち「蠅払ひ」(もちろん僧侶だけが用いた物ではないが)というのでは文脈に合わない。僧侶の加点とすれば「拂子」との混同があつたものか。

⑦ 經緯 中云古靈反：ツネニシテ詩 クヒル 〔上上平〕 論
ノリ 〔上上平〕 選 ツクル 論 ハカル 〔平平上〕 詩 フル 〔平上〕 令 ノトル 〔入平上〕 列 イツ 〔平上濁〕 遊河也 ワタル 〔上上平〕 白ヘタリ切・下順云音尉： (二八七頁7行目)

〔本文〕 河所經也

〔陽〕 河の經テたる所なり〔也〕。 (一オ3)

〔真〕 河の經ル「イツル」所なり〔也〕。 (二左4)

〔醒〕 河の經所也。 (一オ3)

*「イツ」は「出づ」の意だが、『大漢和辞典』にその意は記されていぬ(八・一〇七二頁)。それ故、「河也」と注して特別の文脈の訓だと指示しているのであろう。この訓読では黄河の源という意になるが、現行の通釈では「経る」の意で、「黄河がその麓を流れている」(八木)、「黄河がとおっている」(魚

返)、「黄河がそこを流れていた」(今村)と解釈されている。

⑧ 純淑 類云淳音：モハラ 〔上上平〕 易 オホキニ 〔平平上平〕

書 アツク 〔上上平〕 詩 イト 〔上平〕 論 オモヘラク 〔平上上上平〕 遊 (二九三頁5行目)

〔本文①〕 十娘語五嫂曰 向來純當漫語 元來無次第

〔陽〕 十娘來て五嫂に語曰、向來純當に漫劇トタハフレことす

〔當〕 シ。元來次第無シ。 (二〇オ5)

〔真〕 十娘、五娘に語曰、向來純ラニ當に漫劇(ト)イタハル

〔當〕 (シ)。元來次第無シ。 (二一左6)

〔醒〕 十娘、五娘に語曰、向來、純ク當に漫語とタハフレタル

コト、元來次第無シ。 (二五オ3)

〔本文②〕 熊腥純白 蟹醬純黃

〔陽〕 音読 (二六ウ6)

〔真〕 スミアソフ、スミ (二八右6)

〔醒〕 モハラ (一九ウ6・7)

※テキストに「純」字は三例ある。本文②の二例は「白」「黄」を修飾する用法だから「オモヘラク」と訓むことはない。本文①が、内田氏も言うように「該当しそうな箇所はこのみ」であるが、「オモヘラク」と訓む点本はない。

⑨ 委細 音聲：ホソシ 〔平平上〕 論 クハシ 〔平平上〕 書

スコシキ〔平上平平〕記 ッラク〔平上平平〕遊

(二九八頁3行目)

【本文】新婦細見人多矣

【陽】新婦、細、人を見(ル)こと、多シ〔矣〕。(二八ウ2)

【真】新婦、細、人を見(ル)コト多シ〔矣〕。(二〇右3)

【醒】新婦、細人を見ルこと多シ〔矣〕。(二三ウ7)

※標出語「委細」は何による標出か不詳だが、遊仙窟の訓としては「細」一字のものと見てよいだろう。「細」字は二三例あるが、副詞の例はこれだけ。

※【陽】【真】の「ッラッラ」は「よくよく。念を入れて」、

【醒】の「ツクヅク」は「じっと思いを凝らすさま」とニユアンスは異なるが、『精神を集中するさま』においては同義となる。

⑥〇(細)々 季云遊仙窟云―讀保會夜賀奈利 サ、ヤカナリ

(二九八頁4行目)

【本文】細々腰支参差

【陽】細々トホソヤカなる腰支ノコシハセは参差トヲヤカニシ

て (三ウ2)

【真】細々トホソヤカナル腰支ノコシハセ参差とシナヤカニシ

て (五右3)

【醒】細々とホソヤカナル腰支のコシハセは (三オ1)

【金】細々トホソヤカナル腰支ノコシハセハ (四5・4)

※『季綱切韻』からの再引用に、さらに和訓を引用したものである。

『季綱切韻』は、和田英松博士『本朝書籍目録考證』(三五九頁)によれば藤原季綱(一一〇二年以前没)の編修したものであろうということだ。「外典における漢文訓読語が、和訓として採用されている」(吉田金彦「図書寮本類聚名義抄出典攷(下)」)訓点語と訓点資料第五輯)。一例の片仮名和訓があるが、その他八〇例ほどは万葉仮名表記である。『金光明最勝王經音義』と同じように万葉仮名に書き換えたものである。『文選』『後漢書』『詩経』などの「師説」を引用している。『倭名類聚抄』に『遊仙窟』の師説が引用されているように、この和訓も師説であったのだろうか。

その引用に続けて記す「ササヤカナリ」は、

【本文】婀娜腰支細々許

【陽】婀娜トヲヤカなる腰支ノコシハセ、細々許トサ、ヤカナリ。

(九オ5)

【真】細々許トサ、ヤカナリ (二〇左5)

【醒】細々許とサ、ヤカニナマメキ (七オ5)

【金】細々許とサヤカナリ (四28・5)

と、本文の「細細許」「許」は接尾語を「ササヤカナリ」と訓んでいる(『金剛寺本』は踊り字を脱したものである)ので「遊仙窟」からの訓と判明し、出典は「遊仙窟云」を受けているものと見られる。源氏物語の古注、『河海抄』以下、「細々許」として引用している。なお、「細」一字の訓としても「荷ノ間の細キ(サ、ヤカナリ)鯉」(『醒』・一九ウ5)、「細ナル(ホソヤカナル)鯉」(『真』・二八右5)と見られる。

⑥子一(細) コマヤカニシテ 平平上平○○遊 クハシ 平
平平軽集 (二九八頁4行目)

【本文】煙霞子細 泉石分明

〔陽〕煙霞子細トコマヤカに泉石、分明トアキラカ(ナリ)

(一ウ2)

〔真〕煙霞子細トクハシクシテ

(三右3)

〔醒〕煙霞子細トコマカニシテ

(一ウ1)

〔金〕煙霞子細とクハ○○ウルハシクシテ

(四2・4)

※諸本、訓を異にするが「コマヤカニシテ」は『陽』及び刊本と同訓である。註文に「委曲見微細也」とあるが、『遊仙窟鈔』は「煙霞ハミナ山ノ氣ノタチタルナリ。谷々峯々ヨリ、ホノカニタチタルケブリ、カスミノコマヤカナル景ヲミルトナリ」(卷一・六オ)と注する。

⑥2 妙一(絶) スクレタル物 へ上上濁平○○遊

(三〇二頁3行目)

【本文】實天上之靈奇 乃人間之妙絶

〔陽〕實に天の上之、靈奇、乃、人間の、妙に絶したるなり。

(一ウ3)

〔真〕實に天の上之靈奇シク、乃チ、人間ニ、妙ニ絶レタルモノなり。

(三右4)

〔醒〕實に天ノ上ノ、靈奇とアヤシクメツラシキ、アヤシクアヤシキ、乃、人間ノ、妙絶とタヘニスクレタルナリ。

(一ウ2)

※標出語「妙絶」とあるが、「妙」の右下に「二」とあるので、熟語としての標出ではない。「絶」は「絶景」と同じ用法である。「もの」と訓読されている点からは「真」の訓と一致する。

⑥3 氣一(絶) スヘナシ 平上濁平上遊 (三〇二頁3行目)

【本文】弄小絃耳聞猶氣絶

〔陽〕小キ絃を弄一カキナラす。耳に聞(ク)タモ、猶、氣、絶

(エ)ナむとするモノを (四オ2)

〔真〕氣絶(エ)ヌヘシ (5左3)

〔醒〕氣ノ絶ヘヌヘキモノヲ (三オ7)

〔金〕氣の絶トスルモノ(タエヌヘシ) (四7・3)

※この標出は『遊仙窟』のみの引用なので、『遊仙窟』による標出語である。遊仙窟中に「氣絶」という文字列はこの一例だけなので、「スベナシ」という訓の依拠は不明である。

⑥4 供一(給) タテマツリ物 へ上上上上遊

(三〇三頁3行目)

【本文】兒家堂舎賤陋 供給單疎

〔陽〕兒家は堂舎ノヤカス、賤陋トイヤシウシテ供ノ給ノタテ

マツリモノ單疎(ト)オロソカナラむ。 (二ウ5)

〔真〕供ノ給ノタマツリモノ (四右5)

〔醒〕供ノ給ノタテマツリモノ (二オ8)

⑥5 天一(衣) アマノハコロモ 平平平上上濁上平遊

(三二七頁4行目)

【本文】此是神仙窟也…天衣錫鉢自然浮出

【陽】此は是、神仙の窟なり〔也〕…天衣、錫鉢自然に浮出

ツ。

【真】天衣

【醒】天衣〔天仙衣也〕錫の鉢

※註文には「天衣仙衣也」(無刊記本・三才)と記す。『醒』の書入は有注本からのものか。

60 浣一(衣) アラハヒス同 (三二七頁4行目)

【本文】見一女子向水側浣衣

【陽】一りの女子の水の側に向(テ)浣衣するを見、

【真】浣衣スルを (二ウ1)

【醒】一の女子 水の側二向テ衣を浣ヘルヲ見ル (四右2)

(二オ4)

※語源は「洗ふ」に反復の助動詞「ふ」の接続した語だろうが、「アラハヒ」で洗濯の意、それを「す」とサ変として用いられたようだ。

・あらはひなどする人

〔大和物語〕二七段・一六〇段

・此(の)池(に)濯ヒスル者は、

〔大唐西域記長寛点〕卷七・五行へ『點研』六四一頁)

67 苗裔…ハツムマコへ上上平上平濁遊ハツコ(平平平)

(三三四頁4行目)

【本文】博陵王之苗裔

【陽】博王之苗裔カナ (三オ4)

【真】博陵王には(之)苗裔ノハツコ (四左5)

【醒】博陵王之(之)苗裔ノハツノハツマコ一ノハツノハツコ (二ウ5)

※「馬」「梅」と同様に、「うまご」の転として「ムマコ」の「ム」は両唇音の表記にあたり、「ハツムマコ」は古い表記、「陽」の「ハツマコ」は新しい表記ということになる。『真』の「ハツコ」が「初子」なら孫とは異なる。ともかく、これも出典注記が次の訓にも係る例である。

三 まとめ

以上、『遊仙窟』からの引用を逐一対照して検討してきたが、全六七条の引用の内、重複が二例(8・20)あるので、引用としては六五条ということになる。出典注記は、「遊仙窟」三條(季云遊仙窟云を含む)、「遊」五九條、「同」五條である。その中の二條(11・53)は、テキストに漢字そのものが発見できなかった。出典注記の仕方の見直しから和訓を八語(14・39・44・48・52・60・67)多く認定したので、引用和訓は七三語(重複を除く)となった。しかし、その中、一〇語は一致する和訓が諸本に見つけられなかった。

『遊仙窟』の本文からの一條(40)はともかく、註文から二條(33・55)、しかも一例(55)は傍訓付ということで、図書寮本類聚

名義抄の編者の使用したテキストは《有注本》でその《註文に訓点
が加点されていた本》ということになる。一致する和訓が六三語
あったといってもそれはあくまでも諸本を併せてで、何本或いは何
博士家の訓と言えるほど系統だったものではない。ただ、有注本
『金剛寺本』の発見により六語（35・39・44・49・52・56）の例を
新たに得ることができた。全巻あればと期待されるものである。